

中国の市場拡大期における家族経営酪農と集乳所の性格 —メラミン問題の発生の根拠—

共生農業資源経済学講座 協同組合学分野
ウリンゴワ

経済成長により、現在、中国の乳製品消費は大幅に増大し、それを背景として乳業メーカーは生産を急拡大している。この原料である生乳生産を支えているのは9割を占める小規模酪農家であり、巨大な乳業メーカーと酪農家の間で集荷を担っているのが集乳所である。メラミン事件は集乳所の段階で起こったものであるが、本論文の課題は、集乳所の性格を中国の酪農経営の発展方向との関わりから明らかにすることである。

中国の集乳所には4つのタイプがあり、対象とする内蒙古自治区では、個人により設立されたもの(2,612カ所)、酪農団地に設けられたもの(596カ所)、大規模酪農家が設置したもの(222カ所)、乳業メーカーの直営牧場に設けられたもの(173カ所)に区分される。乳価は乳業メーカー等が構成員となっている乳価委員会によって以上の4つのタイプ別に一律に設定され、集乳所の収入に当たる管理費は乳質によって設定されている。

本論文では、乳業メーカー直営牧場の集乳所以外の三つのタイプを事例として取り上げる。まず、個人による零細な集乳所の事例では、飼養頭数が5頭以下の小規模農家から生乳を集めている。これは中国で最も一般的な集乳所の形態であり、事件以前には設立制限がないために乱立され、機械施設の水準は低位である。集乳総量も少なく、酪農家の得る乳代水準も低い。次に、行政と乳業メーカーにより政策的につくられた酪農団地では、乳牛飼養規模は10頭以上であり、集約的な飼養管理が行われている。事例においては、集乳所は乳業メーカーの資金で建設されているが、後に酪農家を構成員とする合作社の管理に移行している。最も管理された集乳所であり、乳質も高い。最後に、大規模酪農家により作られた集乳所は、草原の「環境保全政策」によって作られた生態移民区の中にある。他の事例が漢族の畑作転換による酪農であったのに対し、移民区のそれはモンゴル族によるものであり、伝統的な放牧の方式を取り入れている。大規模酪農家は、小規模酪農家の乳牛を賃借した牧場経営により乳質改善を行っているが、乳量不足のため外部からの集乳せざるを得ない限界を有している。

メラミン事件以降、乳質に対する規制が強化され、乳質を高めるために小規模酪農家が切り捨てられ、大規模牧場に集約されていくことが予想される。しかしながら、小規模酪農家を組織して農民合作社を設立し、技術指導や飼料の共同購入、共同集乳所の運営を行うことで乳質の向上を図り、乳価の引き上げが可能となる。こうした協同化によって酪農生産と流通の近代化を図ることが地域の安定性をもたらし、乳製品の安全性と品質を高めるうえで有効であると考えられる。